

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

—ロシアにおける近代市民社会思想の生成とインテリゲンツィアの祖型—

「A Phase of Russian Enlightenment Thought in 18th Century」

奥 西 達 也

(平成18年 8 月21日受理 最終原稿平成18年10月13日受理)

I. 18世紀のロシア—近代化と啓蒙の世紀

ロシア史上で「大帝」と呼ばれる為政者は2人しかいない。1人はピョートルI世(大帝) [Пётр I (Великий)] 以下「ピョートル」と略記(位: 1689-1725)であり、もう1人はエカテリーナII世(女帝) [Екатерина II (Великая)] 以下「エカテリーナ」あるいは「女帝」とも略記(位: 1762-1795)である。この2人のツァーリは各々18世紀の前半と後半において「偉大な」統治者としてイニシアティヴを発揮し、時代が要請する国家の近代化(=西欧化)をその非凡な才能と手腕をもって強力に推進し、ロシアを当時のヨーロッパ列強に比肩し得る強国へと導いた。彼らの偉業を讃えた18世紀の叙事詩人ヘラスコフは「ピョートルはロシアの民に肉体を、エカテリーナは魂をあたえた」とうたっている。この意味するところはピョートルが西欧の文明(なかならず物質文明)を取り入れ国家の骨格を作ったのに対し、エカテリーナは西欧の(精神)文化を積極的に導入しロシア人の心を作ったということである^(註1)。詩人が贈った賛辞のごとく、両大帝の近代化に向けての実践と手段にはそれぞれ違いはある^(註2)ものの、彼らの治政がロシアにおける啓蒙の生成と展開を促進したのは紛うかたなき事実である。

ピョートルは強い個性と改革意志、それに並々ならない行動力を兼ね備えた、ロシア史の研究者を魅了してやまない人物の一人である。彼のエネルギーにして強引ともいえる改革は目覚しく、広範囲にわたるものであった。ピョートルは1697年大使節団を結成してロシアのツァーリとしてはじめて西欧を視察した。その後間もない1700年には北欧の大国スウェーデンと北方戦争を開始し21年を費やしてこの戦いを制したが、この西欧との接触および長期の苦戦は、彼にロシアの後進性を痛感させ、西欧文明のメリットを取り入れて、同時代の西欧の絶対主義国家に引けをとらない「強大なロシア」を築くことの必要性を深く認識させる契機となった。それにむけて断行された改革のなかで、とりわけ緊要なテーマとなったのは行政システム、軍事技術ならびに産業の急速な近代化であった。行政改革にかんして言えば、中央集権的近代国家の建設を急務と考えるピョートルは、膨大な課題を効率的に処理しうる機能的な国家機構の確立を目指し、中央行政組織には陸軍・海軍・外務・財政などの分野に、今日でいう省庁に相当

奥 西 達 也

する参議会（コレギア）を設置し、旧来の官署（プリカース）を廃止した。これはピョートルが師と仰ぐ哲学者ライプニッツの進言によるところもあった。それともう1つ不可欠だったのがソフト面の充実、つまり行政機構を円滑に機能させる人材の確保であった。ルイ14世のフランスとは異なりブルジョワという有能な人間のプールを欠いていたピョートル時代のロシアでは、官僚の供給源を貴族に求めざるを得なかった。そこでとられた方策が貴族の国家勤務の強制であった^(註3)。また、ピョートルの時代の貴族は官僚としてより高度で複雑な勤務要求に応える必要があった。そのため、彼は貴族の子弟の教育を義務づける一方で、有能な人材を募るために他の身分の者にも官吏登用への道を開き、平民であっても貴族身分になることを可能にした。これは門閥・家柄に関係なく、年功と功績とによって官等表に従い、一等級ずつ昇進してゆき、一定の官位（八等官）に達すると世襲貴族にもなれるというものだった。出自に関係なく能力や功績次第で出世の道がひらかれるこのシステムは時代の要請に対応する統治エリート^(註4)の創出と貴族の勤務熱を刺激するという機能を果たした^(註5)。

軍事分野の改革においてはピョートルの在位期間のほとんどが列強との戦時体制であったことから、近代戦をたたかうための軍隊組織の創設や戦艦・大砲などの武器の製造、戦力人口の確保のための徴兵制度など軍事力の整備と増強は不可避の政策であった。そしてこれに伴う軍事需要が、製鉄・造船などの重工業から海軍向けの帆布や軍服などの繊維工業をはじめとする軽工業を新興・発展させた。生産の比重は官営工場が多くを占めていたが、やがて貴族や商人が経営する民間企業も出現し、その後のロシアの工業化の基盤を創り出した。ただ注意しておかなければならないのは、労働力の問題である。当時、人口の約9割が農民であり、その多くが土地と領主に緊縛された農奴であって、自由な雇用労働力は皆無に近く、国有地農民が国税納付の代わりに官営工場での労働を義務付けられたり、官民間わず各種工場の労働力として出稼ぎ農民や逃亡農民^(註6)が大きな比重をしめた。つまり、ピョートルは工業労働力については不自由労働力つまり農民を充当したのであり、身分制、農奴制という社会の基礎には改革の手を付けなかった^(註7)。したがって、こうした産業の興隆はロシアの「資本主義化」や「市民社会化」を生み出すものとはならなかったのである。

近代化政策は諸々の分野において新しい知識を備えた新しい人間を要求した。そのためにピョートルは教育政策にも力を注ぎ、様々な世俗的教育機関を次々と設立した。たとえばモスクワに航海学校を開設して（1701年）、貴族子弟の入学を強制し数学、幾何学、航海学などを学ばせし、ペテルブルクには海軍兵学校をひらき（1715年）、そこでは政治学、法学、外国語の習得を義務付けた。ほかにも鉱山学校や砲術・医術の専門学校をつくり、改革を担う人材養成に努めた。さらに高等な学問に寄与する機関としてはライプニッツの協力を得て創設した科学アカデミー（1725年）が挙げられる。ちなみに後にモスクワ大学創設（1755年）に尽力し初代学長となったロモノーソフは当アカデミーの優秀な卒業生である。彼は自然科学から人文諸科学に傑出した才能を発揮した百科全書家的天才であるが、国有地農民の出身である彼がそうした才能を開花させることができたのも、まさにあらゆる身分に門戸を開いたピョートルの教育政策の賜物であった^(註8)。

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

18世紀前半にみられた教育の振興や科学の発展はピョートルの近代化にとっての必要性、有用性に方向づけられたものであった。よって、この時期の傑出した啓蒙の指導者たち、いまみたピョートルの近代化の寵児であるロモノーソフなども含めて、啓蒙を実利的観点から捉えており、政治および社会のシステムの領域に合理主義のまなざしを向けることには想到しなかった。彼らは専制政治という「王笏」^{おうしやく}がロシア国民を目覚めさせ、啓蒙と進歩に導くと深く信じていたのである^(註8)。

もう一人の大帝エカテリーナはピョートルの業績を継承し完遂させることを切望していた^(註9)。その望みに違わず、彼女は秀でた頭脳を駆使し政治的手腕を発揮して、ピョートルが推し進めてきた近代化、ヨーロッパ列強に引けをとらない強大なロシア国家の建設を成し遂げていった。政治においては、ピョートルにならい「元老院はじめすべての政策決定の場」に出席して審議を統括し…側近まかせの“アバウト”な政治に、能率と精度を持ち込んだ^(註10)のであり、地方行政改革では中央集権化の行き過ぎを修正し地方への権力分散と地方貴族の行政参画を実践し中央と地方、エカテリーナと貴族の協調体制を作り上げ^(註11)広大な国土における政治的統一を成し遂げた^(註12)。対外政策ではポーランド分割への参画をはじめ、対トルコ戦争での勝利によりピョートルの夢であった黒海への道を開いただけではなく、さらには西方、南方へとロシア国境を膨張させて、ロシアの版図を描き変えた。国家の拡大は国力の伸張の指標でもあり、これによって「ヨーロッパの辺境」「二等国」とみなされていたロシアはエカテリーナの功績によってヨーロッパの大国から第一級の強国と認識されるようになったのである^(註13)。

ほかにもエカテリーナが手がけた改革はピョートルに劣らず多岐にわたり、その業績も膨大なものであるが、ロシアの思想史のコンテクストのなかで、その治政を見た場合、ハイライトが照てられるのは当然ながら文化の領域、絞っていうならば、啓蒙文化政策を展開した啓蒙専制君主としての活動や政治的対応であろう。またそれが、エカテリーナを総合的に評価する場合、ときには光を投げかけときには翳を落とす部分となるのであるが。

ともあれ18世紀後半、ロシアは西欧とりわけフランスの啓蒙思想の多大な影響のもとに啓蒙運動を展開させた。この運動は啓蒙君主として名高いエカテリーナによって先導された上からの啓蒙であり、そうであるがゆえに封建的諸勢力・制度・機構という自己の権力基盤に攻撃を加えることは決してせず、逆にこれを補強するという反啓蒙的側面さえもっていた。こういう限界を内にもっていながらも、女帝の啓蒙専制はその限界枠を越えて、自らに対峙する反対勢力を図らずもうみだした。これには合理主義や反封建思想ということではひとくくりにはできない様々なヴァリエーションが存在したが、旧来の伝統や政治・社会の制度を無反省に受け入れることに批判的態度をとる潮流もその中から現れた。ここに18世紀ロシア啓蒙思想が成熟の域に達したことを認めることができるが、このような現体制に批判的な思想潮流のなかで最高潮を飾る急進的代表はA.H.ラジーシチェフ（1749-1802）である。彼は女帝エカテリーナが啓蒙専制政治を展開した18世紀後半のロシアを生き、西欧の啓蒙思想家から吸収した該博な知識をロシア人として内在化・血肉化し、ロシアの現実に糾弾ともいえる苛烈な批判を投げかけた人物である^(註14)。彼の主要な思想の1つはロシアにおける農奴制という非人間的システムとこれに立

奥 西 達 也

脚する専制政治に対する批判である（これを「農奴主国家体制」批判と言い換えてもいいだろう）。そのさい彼が批判思想の基軸としたのは西欧あるいはアメリカにおいて市民社会を形成するための市民革命の観念的動力となった自然法思想・自然権思想である。そしてその集約的表明は主著『ペテルブルグからモスクワへの旅』（以下『旅』とも略記）（1790年）においてなされた。本稿では『旅』が出現する環境、つまりラジーシチェフの思想形成にかかわったエカテリーナ啓蒙専制下のロシアの雰囲気、ついで『旅』出版のインパクトとこれに対する女帝の対応について触れる。それからラジーシチェフの思想を主としてこの著作に求め、その内容を考察することにする。

Ⅱ. ライプチヒとペテルブルグーラジーシチェフの思想形成の環境

彼はモスクワの所領で富裕な貴族の家に生まれた。ラジーシチェフ家は何世代もツァーリに仕える名門の部類に入る貴族であり^{〔註1〕}、ラジーシチェフの父ニコライも2000人以上の農奴を所有していたと言われる^{〔註2〕}。18世紀のロシアでは前節で述べたとおり、官界・軍隊で出世するにはしかなるべき教育を受けていることが必須条件であって、貴族社会には特権の待遇を目的に子供を政府の教育機関に入学させる傾向が強かったが^{〔註3〕}、ラジーシチェフもその御多分にもれず、熱心な教育を施された。彼は幼少期、モスクワの親戚アルガマコフ家に預けられ、そこで教育を受けた。が、それは決して旧来の枠にはまったものではなかったと言う。最近創設されたモスクワ大学の教授陣が彼の教師となったり、いつときロシアのホメーロスとして名を馳せたヘラスコフや後に彼の時代で最も著名な劇作家になるデニス・フォンヴィジーンらが頻繁に出入りをする環境だったので、ラジーシチェフは最初の学業時代を文化に目覚めつつあるロシアの中で過ごしたと言えるだろう^{〔註4〕}。そして15歳になると、皇帝少年侍従学校に入学した。ここでは将来の外交官・管理になるための知識や技術について教育されるとともに、女帝エカテリーナの宮廷に侍って宮廷内外の小さな任務に携わる義務があった。また女帝の洗練された宮廷にふさわしい教養^{〔註5〕}を身につけることも強いられたのである。これらを通して受けた宮廷生活の印象一例えば廷臣の奴隷のような媚びへつらいの態度や食欲さなどーは彼がのちに世に出す著作のなかで権力への追従の形象として姿を現すことになる。1776年にはラジーシチェフはライプチヒ大学へ留学する。これは法治国家を理念するエカテリーナの啓蒙政策の一環であり、ラジーシチェフを含めた優秀な若者たち12人が未来の法律家、エリート官僚を囑望されて選ばれた。この留学は、特に次の点で、つまり西欧の先進的思想——とりわけルソー、エルヴェシウス、マブリ——と接触する機会を与えた点で、また、最年長の留学生ウシャコフという高い学識と高潔な精神を兼ね備えた人物との親交をもたらした点で、ラジーシチェフの思想形成に少なからぬ影響を及ぼす機会となった。

5年間の留学を経て1771年に帰国したラジーシチェフは、まもなく政府勤務に入った。帰国後のロシアの印象は多くの点でドイツ・ライプチヒより刺激的であった。逆に言えば、ラジーシチェフたちが帰国の途につく時点でのドイツの文化的到達度は帰国後彼らに幻滅を与えるほど偉大なものではなかった。ライプチヒ大学は当時ヨーロッパ中から学生を引き付けるほどの

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

魅力と名声を誇っており、詩人ゲーテ（1749-1832）もラジーシチェフらと同じ法学部に在籍していたし、彼らは進歩的な教授たちから先進的な考えを学んだりしたが、「不平を言ってもよい、だが服従せよ」を信条とする啓蒙専制君主フリードリヒ2世の理性占有に反逆するあの輝かしいロマン主義的文学運動シュトルム・ウント・ドランクはまだ始まっておらず、世論はほとんど麻痺状態だったからである^(註6)。一方ロシアはフリードリヒ2世とならぶ啓蒙君主エカテリーナ2世のもと、少なくとも表面的にはかつてないほどの文化的繁栄を迎えていた。エカテリーナの治世の初期は、上からの啓蒙運動ならびに文化政策が華やかに展開していた時期だろう。ヴォルテールやディドロをはじめとするフランスのフィロゾフとの盛んな交際や彼らへの援助、失敗に終わったとはいえ、1767年には社会の各層（農奴は除く）から代表民を選んで立法委員会を組織し、利害が調整された国家を建設するうえでの礎石となるべき法律を作成しようとした試み、そしてこの委員会にあてた啓蒙的理念に満ちた『大訓令（ナカース）』の布告、委員会解散後（この委員会は103回の会合をもって1769年に解散する）も自分は啓蒙の理念を捨ててはいないことをプロパガンダするための風刺雑誌の刊行等が、モンテスキュー、ベッカリアの弟子を自認するロシア君主の手によって行われていたのである。実際即位してからの20年間は女帝自身が知的自由主義を掲げていたため、合理主義的思潮の出現を促すこととなった^(註7)。モスクワ大学の教授たちや高級官僚たちはロシアの未来像についての見解を公然と発表し、ヴォルテール主義を標榜したりもした。こうした知的な空気を吸うてみると、ロシアはドイツとくらべて刺激的で開明的だったことが伺い知れよう。

しかしこうした啓蒙的な諸政策の裏側では、封建的体制の強化が図られたのも現実であった。それを如実に物語るのは農奴制の拡大・強化であって、地主貴族がその最大の受益者、農民が最大の犠牲者となった。エカテリーナは自分の権力を支持する寵臣や地主貴族への相当な規模の国有地賜与を行い、立場強化に努めたが、これによって国有地農民は領主農民すなわち農奴となるわけで、結果として農奴制の拡大をもたらしたのである。また女帝は農奴をシベリア流刑にする権利を領主に与えたり、従来は領主の専横・無慈悲な抑圧行為に対する抗議形態として認められていた領主密告をはじめとするツァーリへの農民の直訴を禁止するなど、地主貴族への優遇をおおいに図ったのである。

帰国後ラジーシチェフが就いた元老院での法案作成の仕事^(註8)は、こうした現実を背景とする啓蒙専制国家の諸悪、なかでもロシアの農奴制の悪弊についてラジーシチェフの認識を深める契機となったとも言われている^(註9)。しかし、ラジーシチェフに農民を抑圧することの、すなわち農奴制のおぞましさを決定的に知らせたのはプガチョーフの乱（1773-75）であった。これはドン=コサックのエメリャン=プガチョーフがエカテリーナの亡夫ピョートル3世（1728-62）を僭称して、圧制にあえぐ農民たちが心にもつ「良きツァーリ」信仰に訴え、領主のくびきからの解放を掲げて起こした農民反乱であって、彼はこの事件を県軍司令部の法務官として経験した^(註10)。この職務は軍事規律違反に対する公正な裁判を監視することで、過酷な兵役義務からの逃亡、農奴売買を前提とした兵士買取り、不法な新兵徴募など農奴たちの悲惨な境遇、圧制に対する無権利状態を常に目の当たりにせざるを得なかった。『旅』の冒頭で述

奥 西 達 也

べられているようにラジーシチェフの心は「人間のもろもろの苦悩にひきさかれた」^(註11)のである。だから、衝撃的なこのロシア史上最大の農民反乱も、恐怖心ばかりではなく同情入り交じった感情をラジーシチェフに抱かせたに違いなく、同時に農奴制がロシアにおける矛盾した存在であることを強く印象づけたことであろう。1775年、彼はピョートル3世によって発布された貴族解放令（1762）^(註12)を利用してこの職を退いた。共感を寄せるプガチョーフの乱の残党の処刑に法務官として立ち会ったこと、軍務で目撃する数々の悲惨な事例とそれを防ぐことの出来ない自分の非力の痛感がその理由だと言われている。2年後彼は再び政府勤務に復帰することになる。このときは軍務ではなく民事の仕事に携わることにし、商業参議会に身をおいた。この仕事はラジーシチェフを商業部門全般に関する知識の取得に向けさせた。ついで彼はペテルブルグ税関局に勤務し副局長、1790年には税関局長となったが、ここでの在任中には海外からの著作はすべて彼の手を通過することから、西欧の先進的思想の吸収にも事欠かなかったであろう。それにアングロフィルにして自由主義思想の持ち主であった同参議会長A.H.ヴォロンツォフの知遇と友情を得たことは、彼にとって苦境時代を通じ、生涯の精神的、物質的な糧となったのである。

なお、農民反乱の経験へた『旅』出版（1790年）直前までの時期はラジーシチェフの批判思想の醸成過程と言ってもよいだろう。先にも述べたように、元老院での勤務、法務官職では農民生活の悲惨な現状をはじめ、官吏の権力乱用・汚職、力ある者への追従や諂いなど専制国家の諸悪に関する認識を深めたと、農民反乱は農奴制もまた専制と並んで「人間本性に背馳する」性質のものであることをラジーシチェフに悟らせた。ここ商務参議会での勤めは国内外の経済的見識を高め、ロシア農奴制国家の後進性を自覚させた。農奴制とこれに立脚する専制国家は批判されるべきものとしてすでに彼の意識に昇っていたことは想像に難くない。いまや、これを変革するための手段が、様々の機会を通じて摂取した西欧の知識を持って探られねばならない思想と現実の格闘の時期だったのである。そうして、フランス革命の衝撃がエカテリーナの宮廷を震撼させているなか、この思想的営為は一冊の本として結実し、世に出たのである。

Ⅲ.『ペテルブルグからモスクワへの旅』の出現とその衝撃

農奴制国家の土台を揺り動かししたプガチョーフの反乱を機に、エカテリーナの治世の初期を彩った啓蒙諸政策は影をひそめ、反動的傾向がいっそう強まっていた。

上述したように、これまで女帝は経済の面では農奴制の拡大・強化をはかる一方、思想・文化の方面では啓蒙活動を促進するという二面的な政策を行っていたが、反乱勃発後は自ら音頭をとって先導してきた文化的啓蒙運動に対する反動に回り、体制批判的なもの・進歩的なものを弾圧していったのである。その一つにノヴィコフの風刺雑誌の廃刊があげられる。

そもそも風刺雑誌の出現は、立法委員会の解散後、エカテリーナが啓蒙的自由主義を放棄していないことを表明するために、また、世論を親＝政府的方向へ誘導するために、女帝自らがイニシアティブをとってロシア最初の風刺雑誌『一切合財』を刊行し（1769-70）、ロシアの文人も自分に続くよう奨励したのがそのきっかけであった。この運動は風刺雑誌の台頭を促した

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

が、ノヴィコフ (1744-1818) の雑誌『雄蜂』(1769-70) が発行されたのもこの機運に乗ってのことであった。この雑誌の性格は「どこへも飛んでは行くものの何事も理解せず何事も発見しない蜜蜂であるよりは、他人の悪い仕事を台無しにする雄蜂であることの方が賢明でありはるかに称揚すべきことである」^(註1) という言葉に伺われる。健全な目的意識を失って国家勤務にいそしみ、権力の側が求める「国家の有士」になるよりは、勤務を拒否する怠け者 (= 雄蜂) の立場をとって、そうした「国家の有士」の偽善性を暴くことに意義を認めるという意味であろう。と同時に、これは体制の中心にいる女王蜂エカテリーナへの批判でもあった。この趣意にそってノヴィコフは宮廷・官僚の腐敗をはじめとする社会悪に対して痛烈な批判をこれに続く雑誌の中でも展開していった。しかしこのようなノヴィコフの風刺は明らかにエカテリーナの考える風刺の適正範囲を超えるものであった。そこで、彼女は行政手段に訴えて、検閲の圧力によって彼の風刺雑誌を次々と廃刊に追い込み、プガチョーフの反乱以後、その刊行を禁止したのであった^(註2)。

文化啓蒙活動に対する反動化の波はノヴィコフの風刺雑誌のみならず、国家の経済基盤たる農奴制がはらむ非人間性を批判したフォンヴィジーンにも及び、1783年、『ロシア語愛好者の対話』という雑誌で、「女帝の痛いところ」を突いたため文学活動禁止処分を受け、死ぬまで文学界から退けられたという^(註3)。

ノヴィコフにしても、フォンヴィジーンにしても、もとはと言えば、教化・教育促進の意図もあったであろうが、エカテリーナがクーデタによる皇位篡奪者の汚名を清めるため、また名声欲のために演出した啓蒙運動の中から生まれ出てきたのであったが、彼らの活動は啓蒙専制の枠内に留まらず、それを越えて、逆に、その善悪や悪徳を批判するものとなった。こうした傾向に対する女帝の反動的な態度は、上からの啓蒙の限界とともに啓蒙君主の偽善性を示すものとなったのであるが、エカテリーナから啓蒙君主という外皮を完全に剥ぎ取ったのは、つまり、彼女の反動性と啓蒙理念の放棄を決定的にしたのは、フランス革命の衝撃と革命直後に出版された『ペテルブルグからモスクワへの旅』に対する対応であった。

まだ農民反乱の記憶が生々しい女帝にとって、西欧の専制大国を倒壊させた革命は大きなショックだった。彼女の憎悪と恐怖は、革命のバリを「地獄のかまど」とよび、国民議会を「1200の頭を持つ怪獣ヒドラ」と称したことをみてもわかる。事態が国王ルイ16世の処刑 (1793年1月) に及ぶと、恐怖と警戒は極みに達し、これがいままでも親しく交流を続けていたフランスのフィロゾフたちとの絶縁の機となったのである^(註4)。

エカテリーナにはロシア国内で「このフランス疫病」の「感染」を防ぐことがいまや最大の関心事となり^(註5)、進歩的なもの、批判的なものへの警戒・弾圧は一層強められていったのであるが、こうした中、1790年5月末に『ペテルブルグからモスクワへの旅』(以下場合によっては『旅』とも略記) と題する匿名の書物が首都に現れた。

これは非人間的なシステムとしての農奴制とこれに立脚する専制政治を、自然権思想に依拠して批判した急進的な内容の著作であった。本書を入手したエカテリーナは欄外にコメントを書き込みながら、注意深く読み進めて行き、この中に、「フランス的狂気に感染した」著者の、

奥 西 達 也

「権威に対する尊敬を打ちこわし……政府に対する憤怒の念を人民の心にかき立てようと」する「扇動的」傾向と「革命の呼びかけ」を見て取って^(註6)、この人物を「プガチョーフをも凌ぐ謀反人」と評したのであった^(註7)。

このような過激な著作の出現に恐怖した女帝はさっそく筆者の搜索を行った。内容からそれが該博な知識と教養を持つ人物であることは明らかであった。グロチウス・モンテスキュー・ブラックストーンや近代法学への言及がみられることから、24年前に法学者養成のため、ライプチヒ大学に派遣した留学生のうちの誰かであることも彼女には察しがついた^(註8)。それに、記されていた献辞が身元を明かす有力な手がかりになったに違いない。この著作はA.M.クトゥーゾフという人物（献辞に記されていたのはA.M.K.というイニシャルであった）にささげられているのであるが、彼は少年侍従学校、ライプチ留学時代を通じて生活を共にしたラジーシチェフの親友だったからである。こうして出版から間もない一カ月後、著者と判明したラジーシチェフは逮捕されて、政治犯収容で悪名高いペトロ・パヴロフスク要塞に投獄されたのであった。

それにしても、これほど急進的で苛烈な内容をもつ書物が、検閲などを通して批判的・進歩的な思想に対する警戒を政府が強めているさなか、どうやって書店の店頭で姿を現し得たのだろうか。また、こういう状況にあって、そうした性格の本を出版しようとした著者の心づもりはどのようなものだったのか。

出版の経緯について言うと、当時、出版をするには原稿を検閲に通すことが必要であった。大部分が完成していた『旅』の原稿^(註9)も、これに従って、1788年春、検閲局に提出された。1789年7月22日はすでにフランス革命は始まっており、検閲の目も一段と厳しくなっているはずなのに、時の警視総監ルイレーエフは原稿のタイトルや体裁に油断したのか、内容に目を通すことなく、これに簡単に出版許可を与えてしまったのである。しかしすぐに出版の運びとはならなかった。というのも内容があまりにも過激だったからで、公式な許可を得ているとはいえ、どの印刷所も出版を拒否したからである。そこでラジーシチェフは女帝が「産業の自由」の政策に基づいて1783年に発布した「自由な印刷所の設置に関する法令」に便乗し、印刷機を購入して、自宅で印刷を行った。これがロシアにおける地下出版の始まりである^(註10)。1790年5月、当局の許可を得ず部分的な加筆や増補を行って^(註11)、650部の『旅』が刷り上り、うち7部が親しい友人のもとへ寄贈され、25部がベテルブルグのゾートフ書店に並んだ。店頭に出されたものはすぐに売り切れ、それらは友人から友人へ回し読みされた。そのうち有料で貸し出されるようになり、やがてその賃貸料にまでプレミアムがつく用になった。写筆本も広く流布したといわれている。世に出た部数は僅少なながらも『旅』の出現は相当の反響を呼び起こしたといえるだろう^(註12)。なお、世評に動かされてエカテリーナが秘かに入手していたのは売りに出された25冊のうちの1冊だった。

では、著者はなぜこれほどの危険を冒して出版したのか。理由はいくつも考えられる。執筆・出版の意図については思想の核心に関わることなので詳論は後に回すが、例えば、一刻でも早く農民の惨状を皇帝をはじめ地主階層の者たちに知らしめて、境遇改善の早期着手を訴えんがためにこうした行為にでた、といった解釈が可能であろう。それに、フランス革命に震撼して

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

いるシチュエーションのなかでは、抑圧された農民たちが反乱を起こして支配階層に復讐するという『旅』の中の記述が、一層のリアリティーを帯びて彼らに強いインパクトを与えるのは事実であり、この効果を利用して農民解放の主張を補強したとも考えられる。しかし、案外、出版行為に対してさほど危険を感じていなかったということも大いにありうる。当局の不注意とはいえ許可は公式に得ている以上、非は向こう側にある。検閲後の改変・増補部分については、検閲を通過したものに比べてはるかに穏和な内容である^(註13)からひどいとがめも受けないであろう。このような楽観をラジーシチェフが抱いたとしても不思議ではない。それにこの期に及んでもなお女帝の啓蒙的偽装行為は続けられていた節がある。革命前の1786年にはルソーの社会契約論の翻訳本の出版を許可しているし、政府の新聞は近頃のフランスでの革命的な演説や出来事―国民議会による封建的特権の廃止宣言など(1789年8月4日)―を包み隠すことなく報道していた。のみならず人権宣言(1789年8月27日)の全文を翻訳して記載していたのである。加えて革命直後『政治雑誌』(Политический Журнал, 1790-94)が刊行されたが、その1790年1月の創刊号には、革命を「人類の幸福にとって好ましい多くのことを築く」ものと賛意を示し、「1789年」を「専制的権力の抑圧を開始した、将来何世紀も忘れられぬ年となるであろう」と評する、専制国家では考えられない記事を載せており、言論界における権力の浸透はまだ切実に感じられるほどではなかった。この裏ではノヴィコフがモスクワ大学印刷局長を解雇されたり『モスクワ報知』編集長を解任されたり^(註14)、思想弾圧の予兆を示す事例も起こっていたのだが。ラジーシチェフはこうした自由な雰囲気にもまれて比較的楽観して出版を行ったとも推測できるのである。

しかしラジーシチェフがこのような楽観や希望的観測をしていたとすれば、女帝の『旅』及びこの著者に対する対応はこれらを完全に裏切ったことになる。先に見たように、逮捕・投獄されたのち彼は死刑宣告を受けたのであるが、これは普通では考えられない措置だった。彼のとった行動は概ね合法的であり、大逆罪のかどで死刑に処することはほとんど不可能であった。そこで女帝は「1649年法典」やピョートルの「軍事及び海軍の法令」に訴えて処刑に法的根拠をどうにか与え、やっとのことで「ネルチンスクへ流刑ののち当地で打ち首」という判決を与えることができた。すぐにこの判決は10年間のシベリア流刑に減じられる。近々にロシアの首都に襲撃をかけると脅していたスウェーデンとの間で和平が成立したことによる恩赦がその理由であるが、影でヴォロンツォフの尽力があったことは間違いない。それにしてもラジーシチェフに対するこのような措置が尋常でなかったことは「哀れなラジーシチェフの判決は私の心を深く傷つけた。単なる過ちに対して何という宣言!何という減刑だろう!」^(註15)という自由主義的ロシア人の言葉がよく表している。これほどまでに『旅』がエカテリーナに与えた衝撃はおおきかったのである。

また、女帝が示したラジーシチェフへの一連の対応は、治世の初期にナカースの中で表明した自らの崇高な思想に完全に反則するものであった。「言論の自由を保護する諸条項」では、大逆罪に関する曖昧な法規定は「無数の様々な誤用を生む」^(註16)と注意を促し、「言葉は、それらが犯罪行為を準備するか、伴うか、あるいはそれに携わるしかない限りは、決して犯罪とは

奥 西 達 也

見なされない」とうたわれている。ラジーシチェフの場合、まさに犯罪行為とは無関係の、言論のみにとどまるものであった。にもかかわらず、彼の著作に自分の足元を揺るがすフランス的狂気の危険性と扇動的傾向を読み取ると、堂々と宣言された光輝な啓蒙的理念は公然と放棄された。彼に対する対応がエカテリーナの反動性と啓蒙君主たることの偽善性を最も顕著にあらわす事件であったのである^(註17)。

〔註〕

I

- 1) 原卓也監修『ロシア』新潮社, 1994, pp.32-33。
- 2) ピョートルは自分の意志を強制しこれに服従にない場合は暴力に訴えることによって「近代化」を進めたが、エカテリーナはときに「情け容赦なく」権力を行使することはあるものの、「近代」する上では教育と説得を基盤とした。(Carrère d'Encaurse, *Catherine II, Un âge d'or pour la Russie*, Paris, Fayard, 2002, p.588.)
- 3) 土肥恒之『ピョートル大帝とその時代』中公新書, 1992, p.235
- 4) 拙稿「シチェルバートフと文明化」『С Л А В И А Н А 14』, 1999, p.109
- 5) 逃亡は「農奴制の法的確立（1649年法典）とともに重い負担や抑圧から逃れる、不法だがきわめて普遍的な抗議形態」となった。またピョートル時代には長期にわたる戦争と近代化政策による「相次ぐ増税や新税の負担と兵士や[工場]労働者の徴用」をのがれるために「逃亡は早くもそのピークに達した」（土肥恒之『死せる魂の社会史』エディタースクール出版部, 1989年, p172）
- 6) 田中, 倉持, 和田『ロシア史2』山川出版, 1994, pp.36-37, p.51。
- 7) 同上。
- 8) A.Walicki, *History of Russian Thought from the Enlightenment to Marxism*, Clarendon Press, Oxford, 1980, p.1
- 9) Carrère d'Encaurse, op.cit., p.587
- 10) 小野理子『女帝のロシア』岩波新書, 1989, p.84
- 11) 田中, 倉持, 和田 前掲書, pp.85-86 およびCarrère d'Encaurse, *Catherine II, Un âge d'or pour la Russie*, Paris, Fayard, 2002, p.667
- 12) *ibid*, pp.581-582
- 13) *ibid*, pp.583-584
- 14) 拙稿「ラジーシチェフの政治社会思想についての一考察」『千里山経済学第28-1・2号』, 1995年, pp.1-2。

18世紀ロシア啓蒙思想の一断面 (1)

II

- 1) 確証はないものの、先祖はタタールの公であって、イワン雷帝の聖戦団との対決での敗北後、その家臣に下ったとの言い伝えがある (A.McConnell, *A Russian Philosopher :Alexander Radishchev1749-1802*, The Hague, 1964.p.6.)
- 2) A..McConnell, *ibid.*, p8.
- 3) 勤務志向には経済的事情もあるが、国家勤務を貴族の存在理由とみなす雰囲気が、ピョートル大帝の後、比較的早く貴族社会に定着したことをも意味する。と同時にこれまたピョートルの改革の結果であるが、官等制の導入によって、貴族階級の道が平民にも開かれたため、平民と同じにされたくないという心理が貴族の教育熱を高めた理由の一つである。
(岩間徹『ロシア史』山川出版社, 1979年, pp.258-259。)
- 4) A.McConnell, *op.cit.*, P.12.
- 5) 例えば、紋章学、系譜学、舞踊など (藤家荘一「ノヴィコフとエカテリーナの論争」『北海道大学外国語 外国文学研究』1970年, p.108。)
- 6) A.McConnell, *ibid.*, p.42.
- 7) Carrère d'Encaurse, *op.cit.*, p.269
- 8) A.McConnell, *ibid.*, pp.45-46.
- 9) 元老院に届く込み入った事件や嘆願を選び抜き、それらに対する適切な法令の草案を案出する専門的知識が必要とされた職務である (松田勇『A.H.ラジーシチェフの経済思想』, 1962年, p.6。)
- 10) ラジーシチェフは1773年に元老院勤務を退き、これに転動した。前者を退いた理由の一つは同僚官吏の流儀 (不正・強欲・専横的行為など) への憎悪があったと言われている。 (A.McConnell, *op.cit.*, p.59.)
- 11) А.Н.Радшев, Александр Николаевич РАДИЩЕВ Сочинения, Москва, 1988 стр.27
- 12) 貴族への優遇政策の一つ。ピョートル大帝によって課せられた国家奉仕義務を免除したもの。
(外川継男『ロシアとソ連邦』, 講談社学術文庫, 1990年, pp198-199。)

III

- 1) 藤家荘一 前掲論文, p.113。
- 2) ノヴィコフと女帝との応酬は約一年ほど続き『雄蜂』は宮廷の不興を買い、廃刊に追いやられる。その後もノヴィコフはジャーナリストとしての創作活動を行うが、それ以外にも彼が文化啓蒙事業に果たした役割は大きい。なかでもマソンの資金の運用によって大規模な出版事業を行ない、西欧の啓蒙思想家や文学者の著作の翻訳・出版を精力的に進め、教科書や一般教養書の出版によって教育にも資した。
(小野理子 前掲書, 1989, p.132を参照)
- 3) 松田勇 前掲書, p.6。

奥 西 達 也

- 4) これを機にエルミタージュ宮殿から百科全書家たちの胸像が一つずつ運び出され、最後にはヴォルテールのものだけになったが、ついにはこれも宮殿の地下室に「追放された」という。
(A.Walicki, *op.cit.*, p.8)
- 5) 相田重夫 『帝政ロシアの光と影』, 三省堂, 1983年。p.167。
- 6) A.Walicki *op.cit.*, p.14..
- 7) 女帝の秘書官フラボヴィツキーの日記(1790年7月18日付)に記されている。
- 8) 女帝はわずか30ページ読んだだけで、著者をラジーシチェフと疑ったと言われている。
- 9) これがそのまま印刷されて世に出るのではない。たとえば完成の遅れた「ロモノーソフに寄せて」(《СЛОВО О ЛОМОНОСОВЕ》)の章は1789年9月に再び出版許可をもらって加えられるし、その後、当局の許可を得ずして増補された箇所もある(McConnell, *ibid.* p.106)
- 10) 前掲書、p.170。
- 11) 検閲後、著作の改変を行なったか否かが、逮捕後の取調べの焦点の一つとなった。A. McConnell *op.cit.* p.71.
- 12) 発売直後の『旅』の人気については、A.A.Безбородко伯がボチョムキンの下に宛てた手紙(1790年7月16日付)のなかで次のように言っている。「この書物は多くの洒落男とならんで流行になっています。」(A.McConnell, *ibid.*, p.107.)
- 13) A.McConnell *ibid.*, p.111.
- 14) 1779年、ノヴィコフはモスクワ大学出版所を借り上げて、新聞や雑誌を次々に発行した。主なものに『都郷叢行』(1782-88)などがある。
- 15) S.ヴォロンツォフからA.ヴォロンツォフへの手紙。
- 16) A.McConnell, “The Empress and her Protégé” *The Journal of Modern History*, Dec.1964 No.4. p.21.
- 17) 『旅』の出現がエカテリーナの啓蒙専制主義に決定的打撃を与え、これによって完全に反動化してしまったことは、例えば「フランスの啓蒙主義時代がフランス革命で終わったようにロシアでは革命こそなかったが、同じ時期にラジーシチェフの革命的『旅』の出現によって終わりを告げた」というH.ベルコフの見解に伺われるという。(今井義夫「啓蒙思想家としてのカラムジーンとフランス革命」、『一橋論叢』第60巻3号, 1968年, p.48。)